

ホームページにみる「民俗文化」の位相 —『皆月青年会』と『大蔵谷獅子舞保存会』を中心に—

川村 清志

1章 インターネット上の「民俗文化」

本論は、現代日本のインターネットにおいて「民俗文化」が対象化される契機とその意義について検証する。

すでにマスメディアやマルチメディアを通した文化の表象については、多様な研究分野で議論が行われてきた。とりわけ社会学を中心としたメディア論や文化研究では、その媒体の特質から、表象の産出の動態、受容の過程やそこで生じる交渉過程について、実に多くの研究が行われている。また、文化人類学や民俗学においても、複数の研究者が、これらのメディアが展開した地域についての民族誌記述を通じて、研究を進めつつあるのが現状である¹。

本稿では、これらの議論を踏まえながら、インターネット上の「民俗文化」——ここでは、日本の地域社会において継承されてきた行事や慣習、歴史的に培われてきた生活様式として表象されてきたものと蓋然的に位置づけておく——の位相を再考したいと考える。現代日本では様々なメディアが発達し、人類学者や民俗学者が足繁く通っていた農山村においても、都市社会と何ら変わらないメディア状況が展開している。これらのメディア状況は「民俗文化」にも大きな影響を与えてきた。

そこで以下の章では、「民俗文化」を継承し、それらを執行する当事者たちが、インターネットというメディアを通して、「民俗文化」をどのように意味付けていくかという点に注目して検証を行う。具体的には、自らの所属する地域の祭りや芸能を紹介している個人のサイトを対象したい。ここでの個人の位相は、地域社会に生き、「民俗文化」に寄り添つ

ているという点では、人類学者や民俗学者が「現地」で出会うインフォーマントと変わることろはない。しかし、同時に彼らは、自らの日常的な営みを画像やドキュメントとして構成し、表象する主体でもある。よってここでは現地に固有の「文化」や「民俗」を前提とするのではなく、そこに埋め込まれた外部性や交渉の位相に注意しつつ、彼らが構築しつつある自己表象の特質を明らかにしていきたい。

現地の人々の視点から提示された「民俗文化」を検証することは、研究者が外在的で権力的な布置のもとに現地を表象してきたという非対称性に対する批判を考慮することもある。それはかつての文化人類学が標榜していたはずのエミックな立場とは大きく位相を異にするものかもしれない。だが、広い意味での「現地人の立場」からという人類学が自らに課した最も重要な位置性は、以下の議論においても継承されていると考えられる。

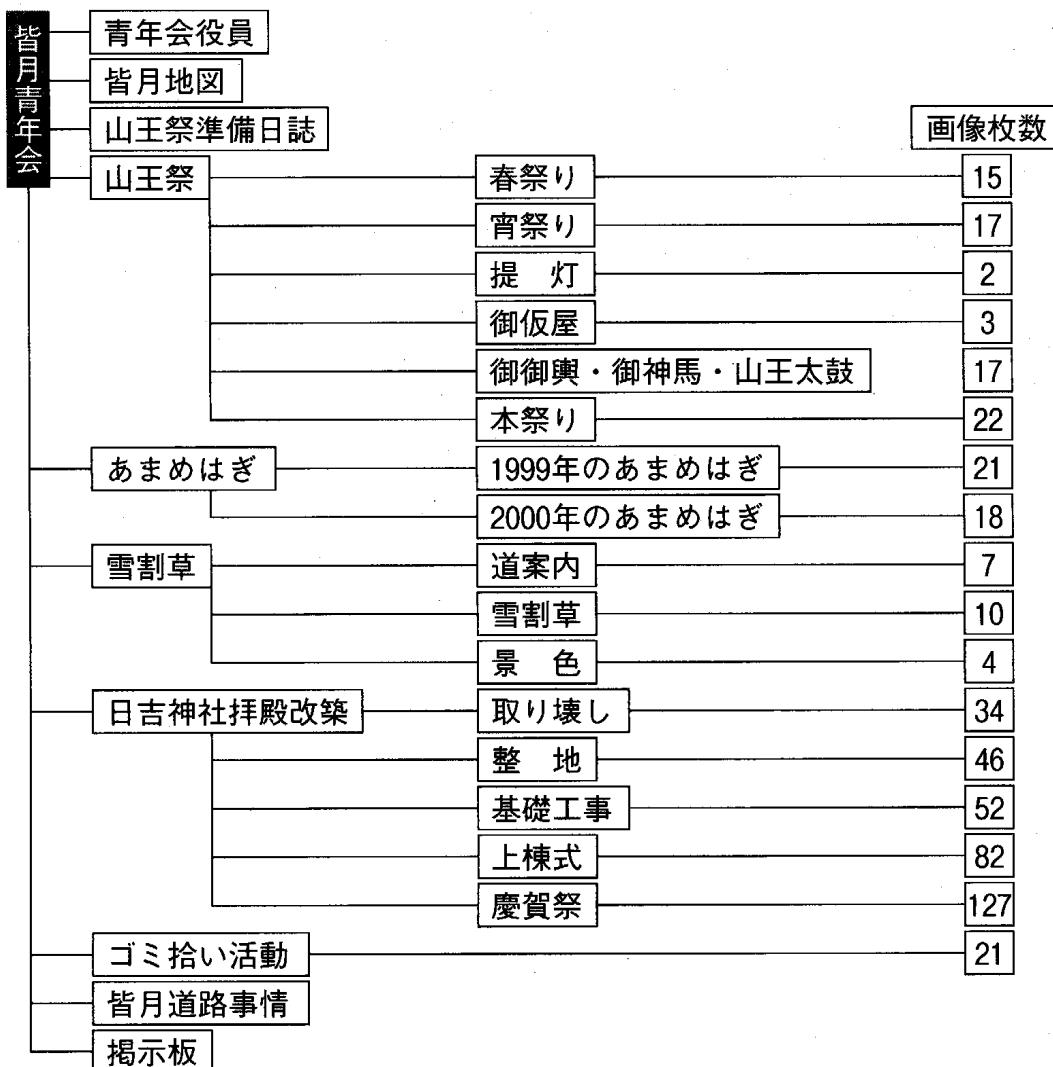
2章 『皆月青年会』の概要

2-1 『皆月青年会』の概要

最初に紹介するのは、石川県鳳至郡門前町皆月の青年会が発信する『皆月青年会』²のホームページである。このホームページは、1998年の11月に立ち上げられ、2001年9月10日現在、6055人の閲覧があった。この管理人は皆月の本町に住み、かつて青年会長を務めた斯波安夫氏である。では、この『皆月青年会』のホームページの内容とはどのようなものだろうか。このホームページは、何度かの更新を行ってきており、とりわけ、地元、皆月日吉神社の拝殿改築にさいしては、短期間の間に更新が繰り返されている。その過程自体も興味深い推移であるが、本論では、2000年8月から2003年12月までのコンテンツを対象としていきたい³。

表1は、『皆月青年会』の全体の見取り図であるが、実際の画面では、左側のフレームから主なコンテンツへと進む構成となっている。この表にあるようにホームページは、大きく4つの内容に分けることができる。1つは、皆月と皆月青年会についての紹介へとつながる。これまでの青

表1 『皆月青年会』構成図



年会の役員の顔ぶれを紹介し、2001年度の役員については、写真入りで紹介が行われている。ちなみに斯波さん自身は、退会前の2年間、青年会会长であったこともここで見てとれる。第2に皆月の景観や年中行事を紹介するコーナーがあり、このサイトの中心的な部分に当たる。その多くは青年会が主導する、あるいは大きく関わっている皆月の行事や活動であり、写真と簡単なコメントを合わせて紹介するコーナーがある。「山王祭準備日誌」「山王祭」「あまめはぎ」などがそれにあたる。

第3に、皆月や七浦全体の出来事や四季の景観を記すコーナーがある。「雪割草」「日吉神社拝殿改築」「皆月道路事情」がそれにあたり、七浦

に流れついた覚せい剤の事件を掲載した新聞も紹介されている。第4に掲示板のコーナーがある。「最近の話懐かしい話、お叱り励まし、ご要望、なんなりと書いてください」といった但し書きが添えられているが、こちらは2000年の4月以降、開けられない状態が続いている⁴。

次節では、これらのコンテンツのうちで内容の充実した青年会を中心とした活動の紹介と彼自身が選択して写し取った故郷の景観や生活の光景を、もう少し詳しく紹介していきたい。

2-2 山王祭

山王祭は皆月の日本神社の夏祭りとして8月10、11日におこなわれる。神輿行列とともに祭りの中心を担う曳山は、青年会員たちが中心となって運行している。青年会会长であった斯波さんにとって、山王祭はもっとも重要な位置づけがなされている。コンテンツのなかでは、「祭りの準備日誌」と「山王祭」に分かれており、「山王祭」はさらに7つの下位カテゴリーが連なる。「祭りの準備日誌」は、8月4日から9日までの青年会と子供会による準備の様子が記されている。ここでは、計15枚の写真が掲載されている。一方、「山王祭」は、「春祭り」と夏祭りの「宵祭り」「提灯」「御仮屋」「御神輿、御神馬、山王太鼓」「本祭り」の5つのカテゴリーに区分されている。その表紙には、「宵祭り」の夜、提灯を灯した曳山を背景に6人の青年会員たちの姿が写されている。曳山そのものではなく、祭りを運営し、取りしきる役員の写真を巻頭に据えていることが、斯波さんの祭りへの視点をよく示している（写真①）。

「春祭り」は、夏祭りとは別に4月3日に行われるもので、撮影は1999年のものである。ここでは、「御仮屋」、「太鼓保存会」、「神輿」、「旗持ち」、「入宮」に分かれて、それぞれコメントが添えられている。ただ、それぞれのカテゴリーの写真が1～2枚であるのに対して、斯波さん自身が所属する「山王権現太鼓保存会」の様子は、6枚の写真によって紹介されている。

「宵祭り」は、山飾りの写真が8枚と、宵祭りの午前中の山曳きの様子が9枚紹介されている。なお、「宵祭り」の横には、独立して「御借屋」



写真① 宵祭りの提灯

と「提灯」の写真が計5枚、「追加」されている。この山飾りは、青年会の役員と祭り好きだけが、早朝5時からヤマの回りに集まってきて、作業を行っていく。

「御神輿・御神馬・山王太鼓」では、「神輿」の写真が5枚、「神馬」が7枚、「太鼓」が5枚紹介されている。神輿は、オカリヤから宮に向けて出発するところが主に撮られ、「神馬」では、主に宮の境内での馬駆けの様子とその馬を先導する青年会員たちの姿が写されている。最後の「太鼓」は、神輿の行列が曳山に追いついてからの写真が多い。ヤマの進行具合で行列が静止することが多く、撮影しやすいからだろう。興味深いのは、4枚目の写真である。宮の境内で老人が太鼓を叩いており、「斯波さんも81歳になります」というコメントが添えられている。客観的な描写のようだが、この斯波さんは安夫さんの父、秀夫氏に他ならない。祭りの一場面に挿入されている家族の結びつきである。

最後に「本祭り」のコーナーがある。こちらは、各々のタイトルが付けられた21枚の画像から構成される。ここで特徴的なのは、祭りの見せ場として斯波さんが選択しているシーンである。21枚の画像のうち、20代の若者たちが行うオオテブリが3枚、「ヤマ揺らし」のシーンが4枚にのぼる。

2-3 アマメハギ

次にアマメハギの紹介をみていきたい。表紙の次に現われるのが、アマメハギについてのきわめて定型的な紹介である。そこには、次のよう

に記されている。

石川県門前町皆月に古くから伝わる国指定無形文化財「あまめはぎ」が6日夜、行われました。奇怪な形相の面様をかぶった若衆らが同地区の家々を回り、「怠け者はおらんか」「(親の) 言うことをきかん者はおらんか」と、子供たちに迫って怠け癖を戒めて歩きます。日吉神社の社務所（番場氏宅）で神事を受けたあまめはぎ一行（天狗、ガチャ、猿面）は2班に分かれ、約150戸を回りました。

「あまめはぎ」の由来は、冬場囲炉裏の傍で座つてばかりいるとできる「あまめ」を剥ぐ、怠けてばかりいたらいけないという戒めをするためのもの。皆月では、約450年前から、1月6日の晩の行事として受け継がれている。尚、近隣の五十洲地区にも同様の「あまめはぎ」があり、こちらは1月2日の晩に行われている⁵。

この紹介は、まさに「無形民俗文化財」としてのアマメハギについての表象にほかならない。アマメハギとは「冬場囲炉裏の傍で座つてばかりいるとできる「あまめ」を剥ぐ、怠けてばかりいたらいけないという戒めをするため」と語られる。皆月のアマメハギは、天狗面を被った面様が榊をもち、2人のガチャ面（鬼を表すとも説明される）はそれぞれ、スリコギとノミをもち、猿面が大きな袋を持っている⁶（写真②）。これらの説明は、アマメハギについてのかなり定型的な表現である。約450年前から「受け継がれている」という歴史的連続性の説明も、人々自身の実感というよりは、文字情報によって再帰的に反復されたものだろう。だが、興味深いのは、そのような紋切型の表象の皮膜をすり抜けていくような画像がこのあとに続いていることである。

アマメハギの表紙から、さらに2つの画面へとつながる。一つが「1999年のあまめはぎ」のコーナーであり、もう一つが、「2000年のあまめはぎ」のコーナーである。

「1999年」はさらに26枚にわかれており、大きな区切りとしては、社務所である番場家での様子を紹介する画像と、各家を回って子供を脅し



写真② アマメハギの表紙写真

たり、神棚に神事を行う場面の2つに分けることができる。社務所での準備や着替えの様子が10枚、実際に家々で脅かす場面が15枚という構成である。もっとも、部外者には意味不明な写真が、26枚目の「おまけ撮影続行不可能」と題された画像である。そこには包帯の巻かれた右足のアップが写し出されている。実はこれは、斯波さん自身の右足である。彼は、この年、戸外でのアマメハギの撮影中にあやまって溝に落ちて、救急車で運ばれるというアクシデントに見舞われていた。

一方、「2000年」は5層に分かれている。最初の画面には、「今年の“あまめはぎ”にもたくさんの取材陣がまいりました。」と記され、「そのカメラの間をぬって私も去年の結末に懲りずにあまめはぎ様に同行し、去年とはちょっと違った趣向の画像を何枚か撮りました」と記している。「去年の結末」とは間違いなく、病院へ搬送されたアクシデントのことである。この文面の下の3枚と2層目の6枚は、社務所での準備の様子やお神酒を頂く場面が紹介され、それぞれの写真にはコメントとタイトルを兼ねた短文が記されている。また、3層目から5層目の計18枚では、各家を回って脅かしている様子が記され、最後の5層目には、斯波さんが「2000年」を更新した際のコメントも付加されている。

そこで彼は、「NHKの取材があったことをきっかけに久方ぶりの更新をすることができました」とホームページの更新が、マスメディアの取材に触発されたものであったことを明示している。ここからもNHKやそれ以外のカメラマンたちの存在が、地域の年中行事を再認させるきっ

かけとなっていることが了解できる。すでに別のところで検証したようにこのホームページは、地域や行事へのマスメディアの眼差しが織り込んだ表象技法を用いているといえる⁷。

さらに斯波さんは「「皆月」に興味を持つ人すべてに楽しんでもらえるようなホームページに模様替え」したとも記している。このような外部からの閲覧者を意識した構成は、次の「雪割草」のコーナーにおいて顕著である。

2-4 雪割草

雪割草は、キンポウゲ科に属する多年草で、まだ雪の残る3月に白や桃色の花をのぞかせる。七浦では猿山灯台附近に自生しており、門前町の町花にも指定されている。ホームページの「雪割草」には、雪割草の花の写真と猿山灯台を中心とした七浦の風景が紹介されている。写真撮影の時期は、1999年3月13日となっている。最初は、猿山灯台までの行程とその風景が、7枚の写真を通じて紹介される。

その多くが道路の標識や猿山自然歩道の案内図を撮っているのは、雪割草を見にくる観光客を想定しているからのようである。もっとも、この案内図の写真には、しっかり斯波さんの娘さんの姿が写されている。彼が七浦を訪れる観光客を意識したことは、「春のドライブコースとして、また来年も雪割草を見に来てください」といったメッセージにも現われている。同時に彼は「自然の大地一面に咲く雪割草はいいもの」と語る一方で、「雪割草を持ち帰らないで下さい。ずっとここに咲き続けてほしいから」とも記している。門前町役場でも問題になっているようだが、車で乗りつけて根こそぎ雪割草の株を持って帰る者が後を絶たないという。このコメントに続いて、やや容量の大きめの雪割草の写真が10枚掲載されている。さらに灯台や皆月湾の遠景の他、皆月内の岩のり干しの光景が紹介されている。いずれも春の初めの皆月の風景が切り取られている。

2-5 拝殿改築

拜殿改築のページは、もっとも長いものである。別コーナーの（皆月の）回覧板も、この拜殿改築に関する資料であることを考えると、斯波さんがこの計画に大きな関心を持っていたことを示している。その巻頭では、かつての拜殿が雪に埋もれた冬の画像と、おそらく8月の10日の早朝に撮られたであろう、祭りの竹が立てかけられた夏の画像、それに新築されたばかりの拜殿の姿をそれぞれみることができる。

これに続いて古い拜殿内部の写真に始まり、「取り壊し」、「整地」、「基礎工事」を経て、「上棟式」さらに「慶賀祭」まで、実に30の小コーナーに分かれており、掲載されている画像は、大小をあわせて370枚を数える。それらが皆月において非常に大きな出来事であり、関心事でもあったことが、ここから窺える。また、この神社の様子を写した写真のなかにも、父秀夫さんや娘さんの姿を散見することができる。

2-6 空き缶拾い

最後の空き缶拾いは、青年会に關係のある行事ではあるが、これまで紹介してきたコンテンツとはかなり肌色の異なる内容である。入り口も山王祭、アマメハギなどとは別にあり、皆月の出来事を紹介する欄の一つから進めるようになっている。時期は、皆月の春祭りの前に行うらしく、ホームページに紹介された1999年は、4月2日の日曜日に行われたようである。「いつも車で素通りする道をのんびり徒歩で」空き缶やゴミを清掃することが、この作業の主な目的である。ページは1ページが使われているだけだが、そのページのなかほどで斯波さんは次のように「空き缶拾い」の経緯を説明している。

多分11年前から、最初は青年会員を中心に、海岸線の清掃活動が始まる。その後、青年会を引退になり、皆月山王太鼓保存会のメンバーが中心となり現在にいたる。

終わった後の爽快感はやった者にしかわからないですよ。

来年はまた1人でも多くの人が加わってできるといいですね。

それよりも空き缶の投げ捨てをする人がいなくなるのが一番ですね。

ここでは、7枚の写真とコメントによって空き缶の清掃風景が写し出されている。1から5枚目までは、実際の清掃風景であり、6枚目は作業を終了したあとに撮られた記念写真である。ここで指摘できるのは、斯波さんたち青年会やそのOBの姿とともに、その子供たちの姿が写し出されていることである。そして、最後の7枚目には「反省会の後の勢いで町に繰り出す」というキャプションがつけられ、斯波さん自身が太鼓を叩いているアップが載せられている。ここでは、太鼓保存会の活動の一環として、この空き缶拾いが再確認されていることがわかる。

また、このページのメッセージは、雪割草と同じく、地域外の人々に対しても向けられている。斯波さんは「私たちの缶拾いの様子を見られた人たちはこの道に限らずどこででも空き缶の投げ捨てはしないで欲しいなあと思いつつ作業しました」と記している。その前文には、作業の当日は「観光（おそらく雪割草見物）の車も多かった」と記していることからも、このような自分たちの取り組みを紹介するページは、地域の外部を対象としていることは間違いない。

3章 『大蔵谷獅子舞保存会』の概要

3-1 行事と保存会の概要

二番目に紹介するのは、『大蔵谷獅子舞保存会』である。このホームページは、兵庫県明石市大蔵谷町で畳店を営む林田桂司氏によって開設されている。それは、彼自身の家業である畳店のホームページの一部としての性格をもっている。ここでは最初に保存会のページについて言及し、そのうえでコンテンツを含めたホームページ全体について概要をみるとしたい。

この大蔵谷獅子舞は、明石市大蔵谷稻爪神社の秋祭りにおいて演じられる。伊勢神楽系の二人獅子で、20以上の舞が伝承されており、1979年

には兵庫県の無形民俗文化財に指定されている⁸。獅子舞保存会の活動の中心は、もちろん、毎年10月の体育の日前後に行われる秋祭りである。そのクライマックスは、日が暮れた後に神社前で行われる宮入の奉納獅子舞である。この時には、保存会が伝承している22の全ての舞が演じられる。また、祭りの期間中を通して「町回り」が行われる⁹。保存会員たちが小型の地車に太鼓をのせ、氏子の家々を一軒ずつ回って獅子舞を奉納するものである。ホームページの冒頭では、この獅子の由来と特徴について、次のように記している。

戦国時代九州大蔵氏の出、秋月種実が上洛の途次に宿泊したのが、稻爪神社の宵宮の日であったため、伝家の獅子神楽を奉獻したのが起源とされ、江戸時代大蔵谷に疫病がはやり、これを祓うため行われた神事で毎年氏子を祓いに廻る。神門の石段で、だんじりの屋根の上で戯れ、荒々しく、またある時は纖細に、或いは天狗、おかめ、ひょつとこの絡み、手に汗を握る三人継ぎ（三人の使い手が垂直に立つ）の技など巧みな演技で見物人を魅了させる¹⁰。

確かにこの獅子舞では、地車の上で舞う舞や「3人継ぎ」と呼ばれる3人の舞手が肩ごしに立ち上がるというダイナミックでアクロバティックな舞を見せ場としている。また、獅子以外にも天狗やオカメ、ヒョウトコ（保存会ではセンマと呼んでいる）の異相の仮面が舞の舞台に登場し、雰囲気を盛りあげる。現在、管理人である林田さん自身は、この3人継ぎの二番目にあがる役を務め、かつては自分の息子を肩に乗せた経験を持つ（写真③）。

『大蔵谷獅子舞保存会』の最初のページは、このような説明に続いて、獅子舞保存会の履歴と活動内容の一覧が記されている。聞き取りによると大蔵谷では、1960年代初頭までは、稻爪神社の祭礼には「西の組」と「中の組」という2つの地域が獅子舞を出していた。しかし、この時期から数年間、人手不足のために獅子舞がでないことがあった。そこで「西の組」と「中の組」の有志が加わり、両方の獅子舞の良い部分を折衷し、



写真③ 三人継ぎの様子

保存会という形で残していくことになったという。

このホームページでは、1975（昭和50）年、獅子舞保存会が、明石市の無形民俗文化財に指定されて以後、様々なイベントや慰問へ出演していった軌跡が示されている。そして、ここから2つのページがリンクしている。一つは『2000年のPhoto gallery』であり、もう一つは『獅子舞保存会in沖縄』である。『2004年宮入の様子』の欄もあるが、まだ、作業中とあって、閲覧することはできない。

3-2 2000年のPhoto gallery

このギャラリーは、28枚の写真から構成されている。最初に林田さんの二人の息子が獅子頭とともに写っている写真が掲示されている。

次に町回りの様子が4枚続く。その次の画像は、「大蔵谷の獅子舞が宮入の舞を奉納宮入」と題された一群のスナップが14枚並んでいる。最初に神社の拝殿前での舞の様子が紹介され、門の前のセンマやテングの様子が写される。その後「ダンジリ」と獅子を持った者が前の者の肩に乗って移動する「オヤマの道中」の様子が一枚ずつ続いている。その後は宮入の舞台での3人継が完成していくまでの様子が、4枚にわたって続いている。ただし、その後の画像はタイトルと微妙にズれている。後半の5枚は、おそらく翌日の「町回り」の様子を示したものになっているからである。

さらに「獅子舞の一番の見せ所、「3人継ぎ」です」として6枚の写真

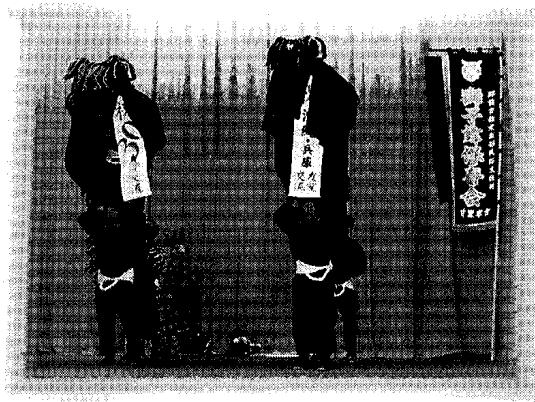
が出ている。こちらは町回りの最中の様子らしく昼間に取られた写真になっている。ただ、ここでも6枚の内の一枚は、林田さん本人がダンジリの前で子供と写っている写真がのせられている。その後には、林田さんが撮影した以外の画像が3枚掲載されており、林田さん自身が家族と写っている様子も紹介されている。

3-3 大蔵谷獅子舞保存会in沖縄

こちらのギャラリーは、「兵庫県文化庁よりの依頼にて沖縄で獅子舞を通じての民俗交流会に参加し」た様子が紹介されている。この企画は、沖縄本土復帰30周年を記念して、2002年9月の14日から16日にかけて、兵庫県と沖縄県友愛交流式典の一環として催されたものである。

冒頭では獅子舞保存会の舞台の様子として「オヤマの道中」の場面の画像が紹介されている。ちょうど獅子の口からは、「祝三〇周年」と「獅子舞保存会」という垂幕が出ている（写真④）。次に会場であり「沖縄県立博物館」のスナップに続いて、獅子舞の公演の様子として、18枚のサムネールで並んでおり、画像をクリックすると大きな画像がみられるようになっている。また、いくつかのサムネールにはタイトルも附されている。

最初の3枚は「加藤会長より最終打ち合わせ」とある。会長を中心にロビーに集まった保存会員たちの姿が写されている。次に「民俗芸能大会」「楽屋の様子」「獅子舞出陣」とタイトルの画像が並ぶ。そこから6枚



写真④ オヤマの道中

分のタイトルはなく、舞台の上での獅子舞の姿が写っている。最初の一枚の踊りは判別できないが、2枚目は「腰のり」、3枚目は「3人継」、4枚目はテングとセンマ（ヒヨットコ）で5枚目は「足技」と続く。「腰のり」は、前獅子の膝の上に後ろの者が足をかけて獅子の幕を高く立てる。前の者は後ろの者を支えながら片手で獅子操る舞である。「足芸」は3人継と同じく3人が一体となって芸を行う。一番下のもとになる人が仰向けの状態で足を上げ、真ん中の者がその足に自分の足をからめて半身となり、さらに自分の肩に子供を乗せる。かなりの力技である。さらに6枚目では、舞台を終えた保存会の一一行が描き出されている。

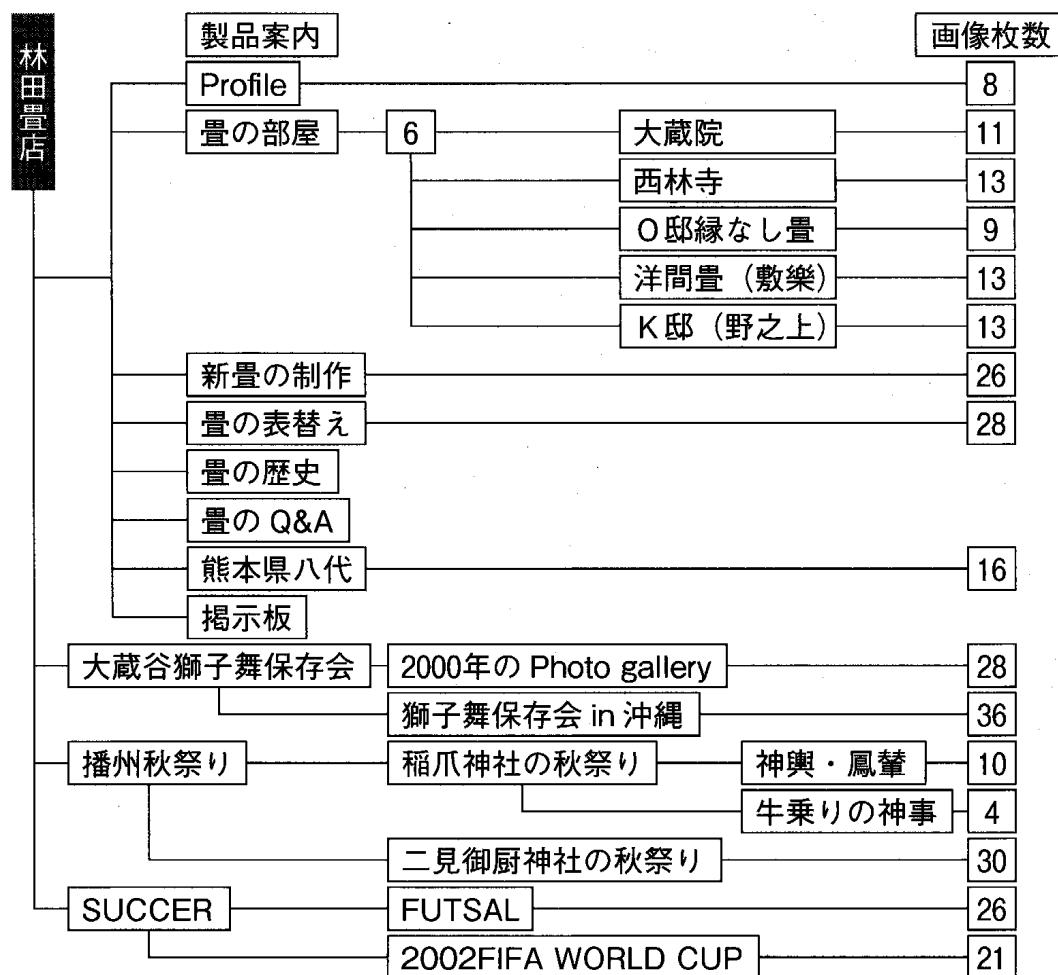
その後「加藤会長挨拶」として会長の姿のアップがあり、全員での記念撮影の様子が写されている。さらに16枚目から18枚目まででは、「終了後、両県の獅子舞を通じての交流会」の姿を見ることができる。沖縄の特徴である毛獅子（頭だけでなく、胴にも毛のついた衣装を来た獅子）を保存会員たちが被っている姿が写されている。

この「in沖縄」には、もう一つのコーナーがある。「珍道中編」と名付けられたそのコーナーでは、16枚の画像の全てにタイトルが附されている。最初の首里城をバックに写した記念写真から始まり、観光名所でのハブの画像やニシキヘビを持っている保存会員の姿、さらには泡盛で盛り上がる宴会の姿も写されている。また、獅子頭をはじめとする道具類を梱包し、空港へと運んでいく裏方の様子もこのコーナーでは紹介されていた。

3-4 畳とサッカー

最初に述べたようにこのホームページは、管理人の家業である畳店のホームページ、『林田畳店』から進めるようになっている。そこで、このホームページ全体の構造を概観してうえで『獅子舞保存会』の位置づけを確認しておきたい。この『林田畳店』表紙の頁からは、主要な9つのコーナーに進むことができる（表2参照）。まず、「製品案内」では、畳床・畳表・畳縁などの紹介しており、「プロフィール」では、林田さん自身や店舗の画像がみられる。

表2 『林田畳店』構成図



残りの「畠のQ&A」と「畠の歴史」は、それぞれ文章によって畠の利用方法やメンテナンス、その歴史的背景が記される。また、コーナーの最後には掲示板と料金表があるが、後者の方は工事中になっている。

以上のような主要コーナーのあとに『大蔵谷獅子舞保存会』と『播州秋明石の祭り』が続く。『播州』では「稻爪神社の秋祭り」と「二見御厨神社の秋祭り」が紹介される。前者は、祭りの最終日に行われる神輿行列の様子を中心に、獅子舞以外の「牛乗りの神事」「早口流し」(共に明石市の無形民俗文化財)の画像と由来に関する説明文が掲載されている。後者では2001年に撮影された8基の太鼓神輿を中心とした祭りの様子が紹介されている。

もうひとつ、「サッカー」というコーナーがある。そこでは、林田さん自身が所属するフットサル(5人制のサッカーを小規模にしたゲーム)のチームの様子や彼の息子さんが活躍する試合の様子が紹介されている。フットサルチーム、「A·F·C-STRONGERS」は、「平均年齢38歳」で、対戦相手を募集中とのことである。また、2002年に行われたサッカーワールドカップの際のイギリス代表チームの合宿の様子についても報告されている。

4章 考察

4-1 ホームページの表象技法

これまで二つのホームページから、「民俗文化」についてのインターネットでの表象のあり方をみてきた。ここでは、これらのホームページの特質について、その全体の構成とそこで主に紹介されている画像表象のあり方から考えてみたい。

まず、ここで表象のあり方における重層性がある。これらのサイトがある地域や団体を標榜しつつも、その運営はそこに所属する一個人によって行われているという点である。そもそも、本稿では対象の設定において団体や組織ではなく個人の管理するホームページを選択していた。しかし、このような個人と団体の二重性は、そこで表象される内容

にも複雑な影響を与えている。

それは、これらのホームページが閲覧の対象として想定するものの重層性に連関している。一方においてホームページは、祭りや民俗芸能、年中行事などの「民俗文化」に関心をもちそうな一般的な閲覧者を想定している。他方でホームページは、管理者が所属している地域や団体の人たちが共有する記憶や知識を必要とする構成にもなっている。

前者としては、両方のホームページが、それぞれの祭りや行事の来歴や由来を語る、その語り口に現われている。そこでは過去からの連續性や地域の独自性、さらには民俗文化財としての真正性が述べられることになる。それは行事を知らない人たちへのアナウンスであるとともにそのような行事を行っている団体や地域という立場からの自己表象でもある。

後者としては、『皆月』で歴代の役員名が列記されたり、逆に『大蔵谷』で個別の獅子舞の技の画像にキャプションがないことがあげられる。これらはその個人名や技の名前を知っていることを前提としての表象と捉えられる。また、ある種の「楽屋落ち」的なキャプションも両者に共通している。『皆月』では、アマメハギの場面ではめをはずしている青年会の姿が描かれ、『大蔵谷』でも沖縄で獅子を舞ったあの観光の様子がユーモラスに提示されている。それらのユーモアとは、これらのホームページを管理する個人の視点が見出した祭りや行事の生きられた経験であったともいえる。

次に重要な点として、これらの画像表象には製作者の家族の姿が色濃く現われているという点が上げられる。『皆月』では、ホームページの制作協力者として、娘さんの姿が写し出されている。「山王祭り」の太鼓の場面でも、管理人の実父が元気に太鼓を打つ姿が紹介されていた。『大蔵谷』では、獅子頭を持つ子供の姿をはじめ、林田さんの家族の姿がそこここに登場している。また、「町回り」では実家の前で踊る獅子の様子が選ばれて紹介されている。このような行事を背景として描き出される家族の姿は、管理者個人の感性である以上に人々がどのような場において写真を撮ってきたかを物語ってもいる。

あるいは、これらのサイトを開設している二人がともに1960年代生まれであり、彼らの30代がインターネットの普及の時期と重なっていることは考慮すべきことかもしれない。かつては家族アルバムにしまわれた写真が、新たなメディアにおける自己表象の方途と結びついた可能性は、より多くの事例のなかで再検証する必要があるだろう。

第三点目に指摘できるのは、両方のホームページにおいて描き出された「民俗文化」が家族や友人をも含めた生活世界の一部として表象されているということである。それは、個人のネットワークとその絆の基礎となる家族をとりまくもう少し広い生活環境を指し示している。

だが、問題はそれだけにとどまらない。ここで重要な点は、まさにこれが生活の表象として斯波さんや林田さんによって選択されたものであるということである。

その表象の重層性はフィールドワークを研究の前提としてきた民俗学や人類学にとって、きわめて示唆的である。『皆月』では、「民俗文化」として「山王祭」や「アマメハギ」以外に、岩海苔干しや間垣、雪割草といった地元の景観や風物が描かれていた。また地域のコミュニティ活動としてのゴミ拾いに加わる青年会員たちの姿も登場している。『大蔵谷』を含めた『林田畠店』では、これらの関係はもっと鮮明に現れる。ここでは家業である畠の紹介に大きなウエイトが置かれ、それに付随する形で祭りやサッカーのページが続くことになる。

ただ、従来の項目重視の民俗調査やアンケート調査では、ゴミ拾いなどのボランティア活動やサッカーチームの様子は、調査項目としてあがりにくかったであろうことは容易に想像できる。しかし、これらのカテゴリーは紛れもなく、地域に生活する人たちが自ら選び取った生活世界の表象に他ならない。斯波さんにとっての空き缶拾いの作業も、林田さんにとってのフットサルも、ともに彼らの生活世界の重要な構成要素をなしており、それらは祭りや獅子舞と同じくホームページの画像のなかに取りこまれている。ところが、既存の研究者が定義してきた範疇にこだわっていては、彼ら自身がそこに住まい一つ、対象化している生活世界の重層性を切り捨てることになりかねない。やや、逆説なことに現地

でのフィールドワークによる調査では、彼らが自己表象として描き出す生活世界を十分には捉えきれない可能性があるわけである。

4-2 「民俗文化」の位相

最後にこれまでの議論を踏まえつつ、それらがもう少し広い枠組みのなかで、どのような課題と関連しあうかについて若干の整理をしておきたい。

まず、本稿が紹介した画像の特質を民俗についての写真資料の検討の枠組みで再考するという課題が生じる。近年、民俗学者が残した写真資料を検討する試みや¹¹、プロのカメラマンによる民俗の表象の仕方についての議論が行われるようになりつつある¹²。しかし、その一方で一般の人々自身が、カメラという媒体とどのように出会い、どのような対象にレンズを向けてきたのか、あるいはそこで人々は何を画像に残そうとしたのかといった問題は、資料の制約もあってあまり論じられてはこなかった。

しかし、近年、より組織的な形でこれらの問題に取り組む研究が現れつつある。例えば、京都の町屋に残る戦前の写真をデジタルアーカイブしていく試みのなかから、古写真の様々な可能性を示唆されつつある¹³。そこで見いだされた可能性は、写された町屋や人々の姿から写真を歴史資料として活用するという点にとどまらない。人々が好んだ画像や写し出した風景を検討し直すことで、当時の人々の生活や風景、さらにはメディア自体への意識のあり方を検証することも可能になるかもしれない。そのような試みと本稿が示してきたホームページの画像は、同列な議論の俎上にのせられてしかるべきだろう。

次の問題は、私自身のこれまでの関心を新たに展開していくうえで必要な作業である。これに先立ついくつかの論考では、マスメディアが描き出す「民俗文化」について関心を向けてきた。そこでは、テレビを中心としたマスメディアが地域や伝承についてのステレオタイプに基づいて放送を制作している点を批判する一方で、そのような表象が地域社会の側に受容されていく状況について議論してきた¹⁴。さらにその議論の

延長上において、本稿で紹介したホームページの一部を資料として用いたこともある。だが、それらの議論でマスメディアとインターネットは、どちらかと言えば、対立的なものとして捉えてきた。しかし、今後は、両者が重なりあつたり交渉したりするような位相を検証していく必要があるだろう。

同時にもっと重要な、そのためここでは示唆的にしか言及できない問題がある。それは、研究分野における「民俗文化」の位置づけに関わる問題である。すでに前節でみたように、既存の民俗学の「民俗」の位置づけや人類学の「文化」の項目に従つていては、これら二つのホームページの全体像をつかむことはできない。そこでは人々の視点や生活の広がりが見失われてしまう。

もっとも、既存の「民俗」や「文化」の範疇を否定することも、あまり生産的な作業ではない。また、かつてのエミックとエティックの議論のように、地域の人々の世界観や価値の体系と研究者が設定するモデルを切り離して考えることにも同意しかねる。むしろ、ここではこれらのホームページの構成において再帰的に表出される「民俗文化」の位置づけを含みこんだ対象の把握が肝要であるだろう。

その徵候は、ホームページの構成にも現れていた。ここで紹介した民俗芸能や祭りは、実際のところ、全て何らかの「無形民俗文化財」に指定されている。そのことは、ホームページにも明示されており、人々がそのような位置づけに自覚的であることを示している。人々は、民俗に関わる研究者が範疇化してきた「民俗文化（財）」をある程度内在化したうえで、それらの範疇と自らの日常的な実践の範疇——ボランティアや家業——とをリンクしているのである。つまり、これらのホームページが描き出していたものとは、研究者による「文化」や「民俗」についての分類枠を入れ子状に含み込んだ形で実践されている人々の生活についての表象に他ならないといえる¹⁵。

それらの表象について、俯瞰的な視点を取ることは困難なようにみえる。もはや、研究者は、調査される側の人々の外側に立つことはできず、そこで発せられた言葉や議論もまた、直接間接を問わずフィードバック

していく可能性を持っている。それは研究者が「民俗文化」についての「言語ゲーム」に人々と同じように内属していることを意味している。そこでのキーワードが「交渉」であれ、「対話」であれ、このような入れ子状の現実を無視することはできないだろう。

- 1 原知章『民俗文化の現在——沖縄・与那国島への「民俗」へのまなざし』同成社、2000、飯田卓「異文化をプロデュースする——テレビ番組と民族誌」『民博通信』102、2-5、2003、湖中真哉「民族誌の未来形へ——オンライン民族誌の実践から」『民博通信』102、6-8、2003などを参照。
- 2 『皆月青年会』(<http://www2.nsknet.or.jp/~cba/>) 参照。
- 3 ただし、2003年の終わりにこのホームページは更新され、その際に拝殿に関わる画像を含め、かなりページが削除されている。
- 4 2001年の8月に斯波さんと話をしたところ、8月の18日にサーバーが回復した。ただ、残念ながら、それ以前の書き込みは全て削除されていた。
- 5 アマメハギメイン<http://www2.nsknet.or.jp/~cba/ama/amamehagi.htm> (2001年11月25日閲覧)。
- 6 一方、五十洲のアマメハギの一行は、天狗面とジジ面とババ面の3人から構成され、神社から出発はするが、神主は関与しない。
- 7 川村清志2003「フォークロリズムとメディア表象——石川県門前町皆月の山王祭りを事例として」『日本民俗学』236号、155~172
- 8 兵庫県民俗芸能調査会1998『ひょうごの民俗芸能』神戸新聞総合出版センター
- 9 2002年まで祭りは、3日間行われていたが、2003年度から2日間に短縮された。この町回りの間、獅子舞の保存会は約300件の家々を回ることになる。
- 10 『大蔵谷獅子舞保存会』(<http://homepage1.nifty.com/hayashida-tatami/shishimaihozonkai.htm>) 参照。
- 11 小川直之「画像資料と民俗学」、http://www2.kokugakuin.ac.jp/frontier/bulletin1/bulletin1_13.pdf 佐野眞一『宮本常一の写真に読む 日本の昭和』平凡社、2004
- 12 菊地暁『柳田國男と民俗学の近代』吉川弘文館、2001、矢野敬一「農

- 村を記録する視線—写真家・熊谷元一とその時代（3）』『静岡大学教育学部研究報告人文・社会科学編』53 静岡大学教育学部 p 1～24、2003、「地域社会と映像メディア—昭和30年代から40年代にかけての長野県阿智村を事例として」『歴史と民俗』19 神奈川大学日本常民文化研究所論集 平凡社 p185～204、2003
- 13 京都映像資料研究会編『古写真で語る京都——映像資料の可能性』淡交社、2004
- 14 川村清志「『ふるさとの伝承』にみる表象の限界——映像化された「伝承」と映像化されない「現実」」、『比較日本文化研究』3、p66～92、1996、「映像メディアにおける「民俗」の表象とその受容——石川県鳳至郡門前町七浦地区を中心として」『国立歴史民俗博物館研究報告』91、p673～691、2001
- 15 民俗文化財の範疇は複数の民俗学者によって範疇化されている。これらの問題については、菊地暁の論考（注12）に詳しい。